

「あふみ」、掛詞としての出発

はじめに

平安朝和歌において、「近江」に「逢ふ身」を掛ける掛詞の修辭が見られる。例えば、次のような歌がある。

貞辰親王の家にて、藤原清生が近江介にまかりける時に、
餞別しける夜、よめる 紀 利貞

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖のつゆけき

(古今 離別 8・三六九)

この歌は、近江介として赴任する藤原清生のはなむけの席で詠まれた歌であり、「今日お別れをして、明日あなたは近江へ行ってしまふ、近江の国は一日で行ける距離であるので、明日には逢ふことのできる身とは思ふものの、夜が更けていったからなのだろうか、袖が濡れていることよ」と歌い、暗に、別れの涙で袖が濡れていることを言っている。清生が明日発って近江に着く、ということに、近江は近国であるので明日また逢える身である、ということが重ねられている。

この掛詞関係が成立するためには、いくつかの条件が考えられる。ま

二 一條 絵実子

ず、「み」に「身」が喚起されるためには、「近江」における「み」が、語源的に含まれている海の意を喚起しないということがあげられる。上代特殊仮名遣いのもとでは、海のミは《ミ甲》、身体のミは《ミ乙》であり、異なった音節であった。その条件が失われても、近江すなわち淡海という意識が働いていれば、身と掛けられる時、海と身体との何らかの有縁性が辿られない限り掛詞にはなりにくいと考えられる。「アフミ」が「近江」と表記され、そこに海の意が消え、単に国名になつていくことが必要であつたのではないか。さらに、ひらがなで表記する限り、「あふみ」という形態に国名「近江」と「逢ふ身」の区別は存在しない。また、「あふみ」が、「逢ふ身」であるためには、「身」という語に、「逢ふ」ことができるという概念を有している必要がある。「身」の意味するものは何であるかを考えた時、いくつかの概念が導かれるが、そのすべての概念に「逢ふ」行為が成り立つわけではない。「逢ふ」行為が成り立つ「身」の概念が生じない限り、「逢ふ身」の概念も生じないであろう。

本稿では、「近江」が「逢ふ身」に掛けられる掛詞修辭の、右のよ

うな条件における成立過程について考察していきたい。

一

「近江」の表記は、『続日本紀』和銅六年五月の「畿内七道諸国郡郷名、着「好字」の詔によるものだと考えられる。このような詔を出したといえども、広く一般の人々まで新しい表記が浸透するには、それなりの時間を要したようで、行政文書でない文献には、和銅六年以降であっても、それ以前と同様に、さまざま「あふみ」の表記が混在する。

「近江」表記が発生する以前、「あふみ」は、「近淡海」で表記された。この国名は、国内に大きな淡水の海を擁することに由る。もとは、淡海は、湖を指す普通名詞であり、萬葉集に用例が存在する。のちに、都から近いところにある淡海、現在の琵琶湖を「近淡海」、遠いところにある淡海、現在の浜名湖を「遠淡海」と呼称することになったと考えられる⁽¹⁾。

「あふみ」は、表記としては「近淡海」の「淡海」を「江」の字に置き換えることで「近江」が発生し⁽²⁾、発音としては、「ちかつあはうみ」から、「ちかつ」が省略され⁽³⁾、さらに「あはふみ」の音変化によって「あふみ」が発生した。

今一度、「あふみ」の表記について、挙げていきたい⁽⁴⁾。

現時点で、国名あふみが記された最古の資料は、奈良県明日香村の飛鳥京遺跡出土の木簡である。釈読されているのは、「近淡」の二字

だけであるが、淡の下に「海」が続くものと考えられている。この木簡は、土坑内からまとまって出土した木簡の一部であるが、一連の木簡が「出土状況から推して土坑へは一括して投棄されたものと考えられる」こと、「大化五（六四九）年二月から天武一四（六八四）年正月の間を限って施行された冠位のみえる」木簡があること、「辛巳年という干支の年紀のはっきり読める」木簡があること等の条件から、天武一〇（六八二）年に作られた木簡と推測されている⁽⁵⁾。

また、同じく木簡資料に、藤原京の飛鳥池遺跡においても淡海と推定釈読できるものが出土されているが、左半分を欠いた木簡である。淡の旁は明確であるものの、全体として、推定の域を出ない。また、前者のように年代が一点に特定できる資料ではなく、七世紀後半頃と幅のある年代判定がなされている⁽⁶⁾。

現時点では、淡海の表記のなされた木簡は、この二点であるが、二点より、「淡海」の表記が七世紀後半にあったということがいえる。文献資料では、『古事記』に国名として用いられている「近淡海」、「淡海」の表記がある。「淡海」が淡水の海水^{みずうみ}そのものを指しているのではない。そのことを示す例として、次の歌謡がある。

是に、其の忍熊王と伊佐比宿禰と、共に追ひ迫めらえて船に乗り海に浮きて、歌ひて曰はく、

いざ吾君振熊が痛手負はずは鳩鳥の淡海^{あふみ}の海に（阿布美能字美邇）潜きせなわ

即ち、海に入りて、共に死にき。

（中・仲哀天皇 歌謡38）
アフミが表すものは国の名であり、海が喚起されていないため、淡

海の国にあるミズウミ、つまり琵琶湖を表現するために、「アフミノウミニ」とさらに海を重ねるのである。なお、この例の引用部分の前に、「故、逢坂に逃げ退きて、」という一節があることから、歌謡の前後の二つの「海」は琵琶湖を指している。さらに、「淡海の家」は歌謡部分の萬葉仮名の表記から「アフミノウミ」と発音されていたことが明確である。今一つ、一字一音で「アフミ」と表記した歌謡がある。置目もや淡海の置目〈阿布美能湊岐米〉明日よりはみ山隠りて見えずかもあらむ（下・顕宗天皇 歌謡112）

この二例より、「アフミ」という発音が存在していたといえる。また、『古事記』に国名としての「近淡海」は十例、「淡海」は八例である。「近江」は見られない。

一方、『日本書紀』にみられる「あふみ」表記は、「近江」八十一例に対し、「淡海」は次の一例のみである。

是の月に、淡海国の言さく〈淡海国言〉、「坂田郡の人、小竹田史身が猪槽の水中に、忽然に稲生れり。身、取りて収め、日々に富を致せり。…」とまをす。（巻27 天智天皇三年）

この一例にのみ「淡海」表記を用いることに疑問が残るが、「言さく」内容が昔話であること、近江大津宮に遷都した天智天皇の段であることによるものか。

『古事記』同様、歌謡には一字一音で表記したのが見られる。

時に武内宿禰、歌して曰く、

淡海の家〈阿布弥能弥〉瀬田の済に潜く鳥目にし見えねば
憤しも

といふ。是に、其の屍を探れども得ず。然して後に、数日て菟道河に出づ。武内宿禰、亦歌して曰く

淡海の家〈阿布彌能彌〉瀬田の済に潜く鳥田上過ぎて宇治に捕へつ

といふ。（巻9 神功皇后 歌謡30・31）

この例から、「アフミノミ」と発音されていたことがわかる。『古事記』では「アフミノウミ」と表記されていたが、『日本書紀』では「アフミノミ」で、「ウミ」のウが省略されている。

『萬葉集』の「あふみ」表記は、「淡海」、「近江」、「相海」の三つが見られる。

その「淡海」の表記のうち、一例のみ湖の意で用いられている歌がある。

草枕旅の憂へを慰もる事もありやと筑波嶺に登りて見れば尾花散る 師付の田居に雁がねも寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も〈鳥羽能淡海毛〉秋風に白波立ちぬ（9・一七五七）

あふみが普通名詞として用いられる例である。一七五七歌の淡海は、鳥羽にある湖（筑波国の古湖）と解釈できる。この例以外のあふみは、国名として用いられている。以下、表記ごとに歌をあげ、考察したい。まず、「淡海」表記の歌は、

近江の海〈淡海乃海〉夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ
（3・二六六）

近江のや〈淡海之哉〉八橋の篠を矢はがずてまことあり得むや

恋しきものを

(7・一三五二)

など十六例ある。二六六歌は、「淡海乃海」表記で、「淡海国の海」を意味する。一三五一歌の八橋は、現在の滋賀県草津市にある地名である。次に、「近江」と表記されている例は、

磯の崎漕ぎ廻み行けば 近江の海(近江海) 八十の湊に鶴さはに
鳴く (3・二七三)

…ちはやぶる 宇治の渡りの激つ瀬を見つつ 渡りて 近江道の(近江道乃) 逢坂山に手向して (13・三二四〇)

など五例である。最後に、「相海」で表記されているのは、次の二例である。

我妹子に またも 近江の(又毛相海之) 安の川 安眠も寝ずに恋ひ
渡るかも (12・三一五七)

あをによし 奈良山過ぎて もののふの 宇治川 渡り 娘子らに 逢坂
山に(相坂山丹) 手向くさ 幣取り置きて 我妹子に 近江の海の(相
海之海之) 沖つ波 来寄る 浜辺をくれくれとひとりそ我が来る 妹
が目を欲り (13・三三三七)

三一五七歌の「近江の安の川」は、近江の国の野洲川の意であり、この「相海」は国名である。この歌は、同時に「我妹子にまたも逢ふ」が掛けられている。萬葉集中で、「相」は「アフ」と訓まれ、「逢う・会う」の意で用いられる例が多数あり、「相」の字を用いることで、アフミに「逢ふ」の意味を含ませたものと考えられる。三三三七歌の「相海之海之」は、「近江の国の海」と解釈でき、国名である。この歌は、「娘子らに逢ふ」、「我妹子に逢ふ」が掛けられており、この二つ

を対応させるよう、「相」の字が用いられたのであろう。この用法からも、国名は「アフミ」という音節構造であったと知られる。

この二首の「近江・淡海」の「相」が掛詞であることに關しては、後に關説する。

以上の考察から、「淡海」は文献資料が見える段階の時代には「アフミ」と発音されていたことがわかる。「淡海」と表記した例には、「淡水の湖」の意で用いられているものも見えるが、そのほかの大多数が国名を表しており、「淡海」表記が国名として定着していたと見られる。そして、「アフミ」表記の大きな流れが、「近淡海」↓「淡海」↓「近江」で、非公式文書で日常に密着した歌という存在の表記として「相海」がある^⑦、といえる。

しかし、一方で萬葉集中の歌のうち、人麻呂歌集から採録された歌の用例に着目すると、「淡海」から「近江」への流れと逆らう。人麻呂歌集は、成立年代が、ちょうど先の二種の国名表記に微妙に關わりと考えられ、重要である。

青角髪	依網原	人相鴨	石走	淡海県	物語為	(7・一二八七)
淡海々	奥白波	雖不知	妹所云	七日越来		(11・二四三五)
淡海	奥嶋山	奥儲	吾念妹	言繁		(11・二四三九)
近江海	奥滂船	重石下	藏公之	事待吾序		(11・二四四〇)
淡海々	沈白玉	不知	從恋者	今益		(11・二四四五)

人麻呂歌集の例は、この五首である。アフミの表記は、「淡海」、「近江」の二種が混在している。そのうち二四四〇歌のみ、非略体歌であり、あとの例は略体歌であるが、その非略体歌にのみ「近江」が用い

られていることが見える。略体を古体、非略体を新体とする考え^⑧には、現在大方は否定的であるが、仮にそうであるならば、前に記紀・木簡の例から立てた、「近江」の表記が平城京遷都以降に出てきたのではないかとする推測と整合しない。人麻呂歌集の成立年代については、未だ定説を見ないが、歌は持統天皇四（六八九）年頃までの作であるとされ、さらに人麻呂は平城京遷都以前に没したとされることから、人麻呂は藤原京時代に二種の表記の使い分けをしていたと考えられる。人麻呂歌集の「近江」表記例は、『続日本紀』和銅六年の詔を待たずして現れたものと推測され、他資料と合わせ見た際の表記の大きな流れが「淡海」から「近江」であることには変わりないが、藤原京時代に「近江」表記が存在していたことが証明されるものである。

二

アフミが「逢ふ身」と掛けられるためには、ミの音節から身の意味が喚起される必要がある。

身とは、どのようなものであろうか。今、複数の辞書から「身」の意味を確認し^⑨、上代および平安朝和歌で用いられているものだけに絞り、分類すると、次の五つとなる。

- ①（人や動物の）からだ。肉体。
- ②（けものや魚の）肉。
- ③身分。身の上。分際。
- ④自分。わが身。

⑤命。

この五つを大別するならば、①と②、③と④と⑤となるであろう。前者は、人間や動物、生きているものからだ、とまとめることができる。からだとは、本来持ち合わせたものであり、赤ん坊が年を重ねるにつれ大きくなるように、変化しないものではないが、運命として引き受けられるものである。そして、からだは、目に見える形として私たちの前に現れる。後者は、人間の人生そのものである。人生そのものとは、ある人からある一点の時間のみを見つめるのではなく、積み重ねた生きざまを見つめる、時間性を伴ったものである。時間軸上に生きてゆくものは、喜怒哀楽を起こさせる心を持ち合わすが、心は、身に内包されるものであり、それ単独では存在しない。後述するように、身と心が乖離することもあり得るのだが、身と心の持ち主は同一である。

では、歌の中で、身はどのような意味で用いられているのだろうか。萬葉集と平安朝和歌から、身が用いられている歌をあげ、考察していきたい。萬葉集中には、身を含む歌が四十四首あり、萬葉仮名による表記は、身・微・未の三つである。古今集中には、六十九例、後撰集中には百三十九例ほど身の用例がある。

剣大刀 身に佩き添ふる ますらをや 恋といふものを 忍びかねてむ
(萬11・二六三三)

：夫の命の たたなづく 柔肌すらを 剣大刀 身に副へ寝ねば
ぬばたまの 夜床 も荒るらむ：
(萬1・一九四)

うち鼻ひ 鼻をそひつる 剣大刀 身に添ふ妹し 思ひけらしも

しらぬひ 筑紫の綿は 身に着けて いまだは着ねど 暖けく見ゆ
(萬11・二六三七)

富人の 家の子どもの 着る身なみ 腐し捨つらむ 純綿らはも
(萬3・三三六)

(萬5・九〇〇)

これらの歌の身は、からだそのものを指しているといえよう。人間という形ある物体に剣や夫、妹、綿が密着した状態である。「剣大刀」は、「身に添ふ」にかかる枕詞で、剣大刀が常日頃、肌身離さず携帯しなければならぬものであったことによる。また、現代でも「衣服を着る」ことを、「身に着ける」と表現することがあるが、人間の形に衣服を着せることであつて、三三六、九〇〇歌の状態と同様である。

：我が子の刀自を ぬばたまの 夜昼といはず 思ふにし 我が
身は瘦せぬ 嘆くにし 袖さへ濡れぬ： (萬4・七二三)

二つなき 恋をしすれば 常の帯を 三重に結ふべく 我が身は
なりぬ (萬13・三二七三)

これらの歌も、身がからだを指している。ある時点と今の時点と比較した時、からだの体積が減ってしまった状態を詠む。減るという状態は、視覚で認識できるものであり、人間の要素のうち、輪郭のあるからだを表している。

朝影に 我が身はなりぬ 玉かきる ほのかに見えて 去にし見
故に (萬11・二三九四 12・三〇八五に重出)

朝影に 我が身はなりぬ 韓衣 裾のあはずて 久しくなれば
(萬11・二六一九)

影とは、物体に光が射した時、そのものの背後にできる暗い形であり、物体が移動すれば、一緒に移動するものである。特に、朝影とは、朝、太陽が低い位置から照らすことによって細く長い影ができるようである。そのような、もとの姿かたちと大きく変わった姿に自分のからだが変わってしまった、と嘆く歌であるが、身、つまり形ある姿が、形のはっきりしないものに変化したということであり、身はここでもからだそのものといえる。

(古今 恋一・五二八)

萬葉集の歌を意識して詠んだとされる、古今集の歌であり、身が影に変わってしまったと嘆く部分は萬葉集と同様である。

：はしきやし 妹がありせば 水鴨なす 二人並び居 手折りて
も 見せましものを うつせみの 借れる身なれば 露霜の 消
ぬるがごとく： (萬3・四六六)

朝露の 消易き我が身 老いぬとも またをち反り 君をし待たむ
(萬11・二六八九)

朝日さす 春日の小野に 置く霜の 消ぬべき我が身 惜しけく
もなし (萬12・三〇四二)

これら三首は、身が露のように消えやすいものであると詠む。形あるものでない限り、消える行為は不可能であり、これらも身が指すものはからだであるといえる。

次のように、身と心が対応している歌も見られる。

天雲の 外に見しより 我妹子に 心も身さへ 寄りにしものを

我が身こそ 関山越えて ここにあらめ 心は妹に 寄りにしも
(萬4・五四七)

のを
(萬15・三七五七)

五四七歌は、あなたに心も身も寄り添っていましたよ、と解釈でき、人の中に、精神的要素たる心と、身体性要素たる身が存在し、その両方が寄り添っているのだ、と読める。三七五七歌は、私の身は関や山を越えた遠い地にあるので、ここにはいないが、心はあなたに寄り添っているものだ、と解釈でき、心と身が乖離している状態であるものの、心と身は、同一人物のものである。このような概念は、古今集の次の歌にも引き継がれる。

東の方へまかりける人に、よみて、遣はしける

おもへども身をし分けねば目に見えぬ心をきみにたぐへてぞやる

(古今 離別・三七三)

三七三歌は、萬葉集三七五七歌と同じ感情を歌ったものである。あなたのことがいとおいしいが、からだを分けることは不可能なので、目には見えない心をあなたへはるかに寄り添います、と読める。さらに、この三七三歌を元に、後撰集では次のような歌が詠まれる。

思やる心にたぐふ身なりせば一日に千度君はみてまし

(後撰 恋二・六七八)

あなたに思いを寄せる心とからだが一緒になったならば、一日に千度でもあなたをみただろうに、と読める。思いをはせる君は、遠くにいるのであろうが、遠い君のもとにある心がからだに寄り添うのであれば、と前句で仮定する。

寄るべなみ身をこそとをくへだてつれ心は君が影となりにき

(古今 恋三・六一九)

人を訪はで久しうありける折に、あひ怨みければ、よめる
身をすてて行きやしにけむ思ふより外なる物は心なりけり

(古今 雑下・九七七)

これら二首も、同様に身と心の乖離が見られる歌である。

ここまでに見てきた身は、身体性を強く表現する、からだとしての身である。次に、時間性を表現する身を見ていきたい。

…もののふの 八十字治川に 玉藻なす 浮かべ流れせれ そを取
ると 騒ぐ御民も 家忘れ 身もたな知らず 鴨じもの 水に浮
き居て…
(萬1・五〇)

金門にし 人の来立てば 夜中にも 身はたな知らず 出でてそ
あひける
(萬9・一七三九)

…花のごと 笑みて立てれば 夏虫の 火に入るがごと 湊入りに
船漕ぐごとく 行きかぐれ 人の言ふ時 いくばくも 生け
らぬものを なにすとか 身をたな知りて… (萬9・一八〇七)

この三首は、「身をたな知る」の表現で詠まれたものである。たな知る(たな知らぬ)身とは、どのようなものか。たなとは、すっかり、十分に、のような全量の意を添える接頭語であり、自分のおかれた状況を全くわからず(たな知らず)、身の上をすみずみまで理解してしま(たな知る)などと解釈できるであろう¹⁰⁾。

一、所心に答へ、即ち古人の跡を以て、今日の意に代へて
恋ふといふは えも名付けたり 言ふすべの たづきもなきは

我が身なりけり

(萬18・四〇七八)

四〇七八歌は、題詞に「今日の意に代へて」とあることからわかるように、今日の気持ちを詠んだものである。たづきもなき我が身とは、どうしたらいいのかわからないわたし、であり、身が精神的要素をも含んだわたし自身を指す。歌中に、「我が身」として詠み込み、心の中の気持ちを表現した歌は、古今集以後急増する。古今集の身の用例は、半数以上が〈我が身〉の語形で表れ、「常の帯を三重に結ふべく我が身」のように「我が身」が「私のからだ」と解釈できるものではなく、我心を内包した「我が身」であり、時間性を保ったわたしと解釈できるものである。

ちる花をなにかうら見む世中にわが身もともにあらむものは

(古今 春下・一一二)

世中のはかなきことを思ける折に、菊の花を見て、よみける
秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

(古今 秋下・二七六)

物思ひける頃、ものへまかりける道に、野火の燃えけるを見
て、よめる

冬がれの野べとわが身を思ひせばもえても春を待たまし物を

(古今 恋五・七九二)

一二二歌は、花も我が身もこの世に永らえないことを嘆く歌である。
散っていく花と同じように永らえない我が身とは、命を指す。二七六
歌は秋の花とともに我が身を詠みこむ。花よりさきと知らぬわが身と
は、花より先に散ってしまう、つまり命途絶えてしまうわたしである。

七九一歌は、訪れがなくなってしまうた自分を、冬がれの野べと喩える。冬がれの野べは、早春に野焼きされる。もし、わたしが冬がれの野べと思おうものなら、燃えて春を待つであろうに、と解釈される。実際は、再び恋が燃える、または、萌えることがないことを嘆くものである。この歌の我が身は、心を抱えたわたしである。古今集における「我が身」は、以上の三首のように「命」「わたし自身」と解釈できるものが大半である。「からだ」と解釈できる「我が身」は、我が身が影になる、といった萬葉集以来の表現を元にした歌であることが多い。

…千沼壮士 菟原壮士の うつせみの 名を争ふと たまきはる

命も捨てて 争ひに 妻問ひしける 処女らが 聞けば悲しさ

春花の にほえ榮えて 秋の葉の にほひに照れる あたらし

き 身の盛りすら ますらをの 言いたはしみ 父母に 申し

別れて… (萬19・四二二)

四二二一歌の身の盛りとは、人生の若い盛りである。人の命は、盛りもあれば、衰えゆくこともあり、身とは、それら時間を超え生きる人間を表す。「身の盛り」という表現は、萬葉集のみであり、古今集では次の歌のように「わが榮り」と表現される。

さ、の葉にふりつむ雪の末をおもみ本くたち行わが榮りはも

(雜上・八九二)

そののちの時代に「さかり」で表現されるものは、人の命ではなく、花へと移ってゆく。また、身の盛りを「あたらしき」ものとして歌うのは、萬葉集四二二一歌のみであり、古今集八九一歌ではくたち行榮

り、つまり盛りが衰えてゆくことを悲しんでいる。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

(古今 春下・一一三)

雷壺に召したりける日、大御酒など賜べて、雨のいたう降り

ければ、夕さりまで待てまかり出でける折に、さか月を取りて、

秋萩の花をば雨にぬれせども君をばましておしとこそおもへ

とよめりける返し

おしむらん人の心を知らぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

(古今 離別・三九七・三九八)

白雪のともにわが身はふりぬれど心は消えぬものにぞありける

(古今 雑体・一〇六五)

この三首は、「身がふる(古・経・降)」例である。ふる行為は、時間性を伴うものであり、身が時間性を持つものと捉えられて「身がふる」の表現が成り立つといえる。いずれも、身がふることを憂う歌で、萬葉集四二一―一歌の「身の盛り」が表現するようなプラスのイメージはここにはない。

時間性を表現する「身」は、人間の精神性をも表現する。その中で、形としての姿が存在する「からだとしての身」とは対照的に、命、自分など、心を帰属させた概念として定着する。その結果、身は自らが自覚するものとなり、ふるものとなる。

身は、身体性としてとらえられる身と、時間性としてとらえられる身の、大きく二つに分けられる。前者は、萬葉集の歌に多く見られ、後者は平安朝和歌に多く見られる。身体性としての身は、現代でも「肌

身離さず」などの表現があるように、用法は消滅してはいないが、古今集以後、歌の中で詠まれることは減ってしまった。心が身に内包されるものでありつつも、身と心を対比的に一首の歌の中に詠み込む技法は、人間の内面を表現するものとして古今集以後も発展継続していった。内面を技巧的に詠む和歌に親しむ平安朝の人々にとって、身体性とともに直に表現する萬葉時代の人々の手法は、引き継がれるものではなく、萬葉人のものとして保管されるものとなったのであろう。時間性としての身は、萬葉集にも平安朝和歌にも用例があるが、作歌の方法が継続されているかといえば言い難い歌も多々ある。題材のとなえ方は継続されているものもあるが、平安朝では、身とともに用いられる動詞が増えた。つまりは身とともに行われる概念が新たに発生したといえる。

三

我妹子に またも近江の〈又毛相海之〉安の川 安眠も寝ずに 恋

ひ渡るかも

(萬12・三二五七 羈旅発思)

萬葉集三二五七歌において、掛けられている語は何であるのか。三二五七歌は、我妹子に再び逢うという、近江の野洲川よ、安らかに寝ることもできずに、恋続けることだ、と解釈できる。「我妹子にまたも逢ふ」、「近江の安の川」と解釈し以下の句に続いていく。

この歌は、「近江」に「逢ふ身」の掛詞といえるであろうか。先述した条件に即し考えると、まず、上代特殊仮名遣いが存在している時

代背景でミの音節が異なっている。さらに、この歌の時代の身の問題からは、身は「逢う」ものと言えないのではないのか。逢ふことは、この世の偶然的な出来事である。もし身と身が逢うのであれば、萬葉集ではそれは、半ば運命的な、存在の本来性を負った必然的な出来事になるはずではないのか。「近江」に掛けられているのは、「あふ（逢ふ）」だけであって、ミ甲とミ乙の上代特殊仮名遣いの差を超えてまで掛詞関係を求めることはできないと考える。

以下の三首は、古今集、後撰集からの例である。

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖のつゆけき

（古今 離別・三六九）

あふみてふ方のしるべも得てし哉見るめなきこと行きてうらみん

（後撰恋四・八五八）

相坂の関と守らるゝ我なれば近江てふらん方も知られず

（後撰恋四・八五九）

三六九歌は、「はじめに」に解釈をしているので省く。八五八歌は、「近江という方向の目印を得たいものです、淡水の水海ゆえ、海松布が生えていないことを湖に赴き恨み言でも言いたいことだ」と解釈できるが、同時に、「あなたに逢ふ身という道の方向を得たいものです、見る目がないことを、あなたのもとへ行つて、恨み言を言いたいことだ」と本意を言う。八五九歌は、八五八歌の返しである。「相坂の関に見守られている私ですから、近江という方向など知ることができません」と表面的には言うが、本意は、「逢ふことを関でとめられている私に逢ふ方向など知ることではできないでしょう」である。

相逢うことは、時間的な出来事である。逢うのは、心と心ではなく、生きてあることの時間性を負った身と身であらねばならない。その現世性が、前代と異なるこの時代の人の自己認識であった。

平安朝以降、国名「アフミ」は「近江」という表記にほぼ統一され、ミが海であることは喚起されていない。また、歌中において「近江」と表記する場合もあるものの、かなで「あふみ」と表記することが可能となった。かな表記の「あふみ」は、「近江」、「逢ふ身」のいずれも喚起可能である。そして、上代特殊仮名遣いによる音節の使い分けもなくなり、海のミも身のミも同じ音節となった。平安朝における「身」は、「逢ふ」ことができる概念に変化しており、「逢ふ身」という概念が展開した。これらの条件により、平安朝以降、「近江」が「逢ふ身」の掛詞として成立していったものと考えられる。

注

(1) 「遠淡海」の表記については、北川和秀氏が「実際に「遠淡海」という表記は本簡にも金石文にも記紀万葉等にも見えず、わずかに国造本紀に見られるくらいであるが、「近淡海」がある以上、当然「遠淡海」も行われていたと考えられる。」（「人麻呂歌集の「近江」表記について」『柿本人麻呂《全》』笠間書院、平成一二・六）と指摘される。論者も「近江」に対する「遠江」の表記がいきなり出現したとは考えにくいので、「遠近海」表記があつてしかるべきだと考える。

(2) 『説文解字』に、「江水。従水。工声。」とある。

(3) 同名の地名に、「ちかつ」「とほつ」を接頭語的に付け区別しつつも、

のちに、都で生活する者から見て使用頻度が高い方の地名の接頭が省略される例に、「近飛鳥」「遠飛鳥」がある。この例は、難波宮から見て「近つ」飛鳥、「遠つ」飛鳥、であるが、のちの遷都により、「遠飛鳥」が、「飛鳥」と呼ばれるようになる。

- (4) 「あふみ」の表記については、前掲注(1)「人麻呂歌集の「近江」表記について」のほか、八木京子氏「懸詞」と地名表記―七世紀の文字と「レトリック」としての文字―(『日本女子大学紀要』五七、平成二〇・三)に指摘がある。

- (5) 岸俊男「飛鳥出土の木簡削片」(『明日香風』17、昭和六一・一)

- (6) 奈良文化財研究所「飛鳥藤原京木簡―飛鳥池・山田寺木簡―解説、図版」(奈良文化財研究所史料第七十九冊別冊、平成一九・三)

- (7) 前掲注(4)「懸詞」と地名表記―七世紀の文字と、「レトリック」としての文字―において、「うた」の内部に用いられる地名表記が、題詞や左注と異なり、「自由」な表記傾向を探る」と指摘され、人麻呂の表記に「うた」の文字として、創意工夫の上で特別に用いられたと思われる例など、じつにさまざまな状況性を有している。」と述べられる。三一五七歌、三二三七歌は、人麻呂の歌ではないものの、「逢ふ」の意を喚起されるために「相」を用いており、「自由」な表記傾向といえるであろう。

- (8) 稲岡耕二「人麻呂の表現世界」(岩波書店、平成三・七)

- (9) 参照した辞書は、角川古語大辞典(中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義編・昭和五七・平成十一)、時代別国語大辞典 上代編(三省堂、昭和四二)、岩波古語辞典(補改版・大野晋、佐竹昭広、前田金五郎編・平成二)、旺文社古語辞典(第十版・松村明、山口明穂、和田利政編、平成二〇)の四つである。

- (10) 一七三九歌については、坂本信幸氏が「身をたな知る」より覗い知る歌人高橋虫麻呂(『萬葉』八三、昭和四九・二)にて、詳細な解釈を施されている。「手児名は、生まれてからどれほど人として生きていな

い娘子(未だ人の如何なるものかという自覚を持つには若すぎる年端の娘子)であるのに、どうしようとして、己の身を(どうせやがては消ゆべき、借りの身なのだと)すっかり自覚して、波の音の騒がしい湊の墓所に娘子は臥しているのか……(原文漢字片仮名文)と述べる。

※本文の引用にあたっては、『古事記』および『萬葉集』、『日本書紀』は、新編日本古典文学全集、『古今和歌集』および『後撰和歌集』は新日本古典文学大系を使用した。

※語彙の検索には、「萬葉集電子索引新プログラム」および「国歌大観CD-ROM版」を使用した。

※木簡の検索にあたっては、奈良文化財研究所「木簡データベース」を用いた。

附記 本稿の内容については、平成二十三年一月二十二日、科研費「東アジア古典学としての上代文学の構築」研究会(於京都大学)にて種々助言をいただいたが、すでに再校の時点であり、その内容を活かすことはできなかった。それについては、別の機会を期したい。